

「まちテクぷちギャラリー」 #3

2013 年 11 月 12 月の展示

服部賢司・菅沼緑

花巻市東和町土沢商店街 21 カ所

発行 東和町土沢商店会連絡会 2014 年 2 月 25 日

企画・編集 toncacci atelier

花巻市東和町田瀬 14-120

代表 菅沼緑

roqu@me.com

<http://www.arttsuchizawa.com/>

<http://machikado.urdr.weblife.me/>





2014年1月～2月の展示 服部賢司・菅沼緑

#3



「無責任な泉」 1984年 150x120x60cm ケヤキ、黒檀など 撮影：安西重男

どうしたって、最初の頃の初々しさは消えてしまうものです。

そりゃぁ贅沢というもんだよ。という声も聞こえてきそうだけれど、美術の作品を作るということは、最高の贅沢であるべきで、ちょっとだけケチるってもんでもないはずです。

そういう意味で見ると、この23ページの「無責任な泉」というタイトルで作った、この作品は技術的にいやらしい、これ見よがしなところがあるなど、この写真を見ながら、制作後20年過ぎて思いがいたりしました。

当時からそういう気持ちが自分でも分かっていたんだろう、もっと素朴に作ろうと思ったのが、順序が逆だけど前のページの作品です。ゴシゴシとやすりで削り、手の痕や、いい加減さをその中心にした作品でした。それ以後は技術的な側面をなるべく見えないように気をつけていたつもりなんですけど、やはり、木とのなれ合いはまだまだ払拭し切れていないようです。

そういうこともあって、最近ではベニヤ板を使うようにしています。

(すがぬまろく)



「人の帽子伏し目」 1992年 80x140x40cm シカモア、パドック、など

撮影：菅沼緑

なり何度も繰り返しました。

そして 22 ページと 23 ページの物は、部品として作った形を寄せ集めるようにして、「ひとつにまとめた」ものとして考えたものです。

組み合わせ方にも、いろいろ方法はあるだろうけれど、形から生まれてくるイメージに逆らわず、ここではかなり素直に受け入れてしまおうと、多少はギクシャクしていたような気もしますが、柔軟な発想にはなっていたような気がします。

自分の作品は自分で作ること、というのが私の内側では決めていた条件のひとつだったので、木という素材は工作もしやすく、自分の体や感覚にかなり馴染んでいたように思っていたのです。

そういう思い込みで当然のように、ずっとそれを使っていたけれど、慣れるということはやはりいろんな不具合も引きずり出してくるものです。

この前、うまくいったから、またその方法でやってみようなどと、どうしてもつい考えてしまうこともあります。すると、技術的な方法の再現ということになってしまいがちで、2、3 度くらいまでは許されることはあるでしょうが、だんだん手慣れてきてしまい、しまいには嫌みになると思うのです。

この小冊子は「まちテクぶちギャラリー」の記録です



このまちは「土沢商店街」の北の丘、館山に往事あった城を中心に発展した、いわゆる城下町でした。商店街の道は釜石街道として鉄道と平行しており、昭和までは賑わっていて、このまちに生まれ育った萬鉄五郎を顕彰する萬鉄五郎記念美術館があり、文化的、商業的にもカナメにしようという気分が醸成しているとおもうのは私だけではなく、アート@つちざわしかり、クラフトマーケットもそうした思いの延長です。一時的なイベントではなく、これは通年で作品を観ることができる。歩けば見える景色の一部です。道に沿った塀に開いたフシ穴みたいなもの。そこから見えるのは自分自身に呼び掛ける想像力のこだまなのかもしれませんよ。



「無責任な泉」 1980 年 75x180cm

撮影：菅沼緑

素材と気持ち

材料に慣れるとろくな事はないと思う

人の作品のことは結構無責任にいろんな事が言えるけれど、一旦自分のこととなれば、話が別です。

この小冊子に掲載した私の作品は、1973 年から 1992 年頃の約 20 年間の作品です。

18、19 ページ、見開きの物が、ときわ画廊の 1973 年の作品です。紙粘土で具体的なイメージを持ち込まずにどのくらいの種類の形ができるものだろうか、という実験をしたわけでした。

そして、形そのものを見るには素材がシンプルなほどいいと思い紙粘土を選び、来る日もくる日も、同じ形にならないように気をつけながら 200 キロほどの紙粘土を全て使い切り、ときわ画廊の床のビータイルに 4 ケずつ並べると、ピッタリ床が埋まってしまいました。そこまで計算したわけではなかったけれど、私自身にとっても非常におもしろかった展覧会で印象的な記憶です。

そして左の 20 ページの物は、ギャラリーホワイトアートでの初めての展覧会で、1982 年だったかと思います。この時の素材は木で、自分の好きな形を沢山作り、それらを後からこれとこれ、という具合に組み合わせ、いわば構成した物で、全部で 500 個ほどになりました。

そしてこのページの上の写真はそれらの作品を箱に入れたものです。

この 3 枚の写真の作品は、ひとつだけではなんということはないものだけど、こうして沢山並べると不思議なエネルギーが出てくるような気がして、その不思議さとはなんなのだろうと、このシリーズはか



ギャラリーホワイトアート 1982年 撮影：安西重男

まちテク ぷちギャラリー

展示の場所

花巻市東和町土沢商店街

商店街の外壁に展示した青空ギャラリー。板塀に開いたフシ穴から覗くような、極私的で自己満足的な展示ですが、覗いてみたくなるフシ穴となるべく工夫のひとつとして、この小冊子とウェブ (<http://machikado.urdr.weblife.me/>) でも記録をしています。



まちの中に作品写真を展示する





「ひとりトランプ」 ときわ画廊 1973年 紙粘土 撮影：安西重男



この回では 21 カ所の展示でした。

展示の様子を写した写真の下にあるキャプションは丸数字が地図の番号です。次が店の名前。そして作者の名前が示されています。

この回展示をしたのは、服部賢司・菅沼緑の 2 人です。

服部君とはやはり 20 代の頃からの友達で、30 代になって野球のチームを作るのがはやり、絵描き仲間でもやろうということになり、監督として服部君が活躍をしました。服部君は作品だけでなく、何事に対しても緻密で丁寧な計画に基づいて対応し軽々にスタイルを変えません。ですからここにある作品もそのスタイルは 3-40 年前と殆ど変わる事なく同じ作業をコツコツと続けていて、色の微妙な変化による形の現れ方を、長年追求というよりも確認し続けているのです。

方や私、菅沼緑の方はそのかたちをコロコロと換え続けています。また私は既にある形の見え方に飽き足らず、よりハッキリと確認できる形にのみ反応を示し、その形の表し方にしても順々に換えて彷徨い続けています。

このようにこの展示では対照的な作品を並べることで、コントラストをつけて互いの存在をより鮮明に表してみたいと考えています。



⑧ 笹倉商店 服部賢司



⑩ 平沢宅 服部賢司



⑨ 金星 服部賢司



⑨ 金星 服部賢司

を色や形に込めて表現の媒体として描きながら考えられてきたんだろうと私は思うのです。しかし、60年代の後半頃から、絵画の持つイメージとか象徴性ということにスポットが当てられて、イメージに依存するのではなく、絵画そのものの意味ということがにわかに若い美術家たちを捉えて束縛をしました。

いや、もっと前からマルセル・デュシャンの「レディーメイド」などは、イメージを共有することは社会的な制度によって、形作られているんだと「既成概念」に対向し、想像するということの意味を激しく揺さぶったのでした。

そうした時代の背景の中で、服部さんが通っていた「現代美術研究所」でもやはり、若者たちを自由に戦わせたんだろう、実験的な事に対して誰でもが夢中な時代でもあったと思います。

そういう環境の中で、私たちの世代は無我夢中で新しい世界、こことは違う、より真実に近いところへ行きたかった世代だったのかも知れません。

若者というのはいつの時代でもそうだったと思います。(今でも変わりなくそうした指向は確実にあるのだけど、社会の構造がそれを際だてるほどお人好しではなくなってしまったのかも知れません)。いつの世でも、新しいことが始まると、革新的なという言葉に乗かって、我も我もと若者は一斉にそれに乗り遅れるまいと道を急いだのです。この頃は「イメージ」という、人が共有する想像力を改めて見つめ直そうと、皆が考えていたと思います。服部さんもやはり、吉本隆明に惹かれ特に難解ながら著作「共同幻想論」からは多くのことを影響されたとよく話をしていました。

絵画と芸術を構造的に捉えて、キャンパスの上の絵の具の事だけではなく、それが形やイメージとなった時の現れ方や、表現するということが芸術の神様にどう関わるべきなのかというようなことまで、真剣になって口角泡を飛ばすことに、快感を感じていたのかも知れません。

どのような結論を得るにしろ、実感した事はものすごく強いと思いますが、その実感すらこれだ!と言い切るには、その頃の私たちは若すぎた。いや歳をむさばり食って、老いのとば口まで這いずってきた芸術家たちがそれでもなお、自分の腹の這いずり蛸をさすりながら、匍匐前進を続けるのは、その先にやはりなにか本当の芸術のようなものがあると感じているからです。進めば進むほど、その先が遠くなって解らないことだらけになっても、止むことがない。これは癖みたいな物なのでしょう。

私たちの年代はそういうおかしな性癖に凝り固まった戦友同士なのかも知れない、ちょっと可笑しい奴らなんですね。

(すがぬまろく)



work2012-j 410x242cm 2012年 油彩・キャンバス



② 浅与建設 服部賢司



④ 小原歯科 服部賢司



⑥ 佐々長醸造 服部賢司



⑦ キクヤ薬局 服部賢司



⑱ てしごと屋 菅沼緑



㉑ シルクロード 菅沼緑



㉒ 中西金物店 菅沼緑



㉓ 小桜屋 菅沼緑

孤独な匍匐前進

私たちの年代はそういうおかしな性癖に凝り固まった戦友同士なのかも知れない

服部さんと最初に会ったのはいつどこでだったかがハッキリしません。

それは古い思い出になるし、古い思い出は次々忘却の彼方へ飛んでいってしまう、私たちの年頃ということもあるのでしょう。

その私たちが若かった頃、みんな頻繁に画廊を見て歩きましたが、画廊で出会う人たちの中に現代美術研究所の出身という人も少なからずいて、皆それぞれに活発な発表活動をしていました。

仕事が終わって、夕方三々五々神田のときわ画廊や田村画廊にそれとなく集まる人たちは学校を出たての私たちから、ずっと年代も上のさまざまな作家たちとそこで出会うわけです。作家だけでなく、評論家や美術出版社の編集者たちも、神田へ行けば出会う人と話しに満ち溢れていたわけです。

服部さんもそうした中でも会うし、服部さんは茅ヶ崎に住んでいたのでも互いの家を行き来もしていました。当時草野球チームを作ることが大流行で服部さんは高校時代には野球部で活躍をしていたこともあり、藤沢茅ヶ崎鎌倉辺りの仲間たちと「ル・ジタン」というチームを作ってよく集まっていました。服部さんはチームの監督をしていたのですが、服部さんは決して羽目を外すようなこともなくいつも冷静な態度で野球を楽しんでいました。もちろんどんなことにしろ、人の行動とはその時だけ特別に人が変わるということは少ないものだと思います。

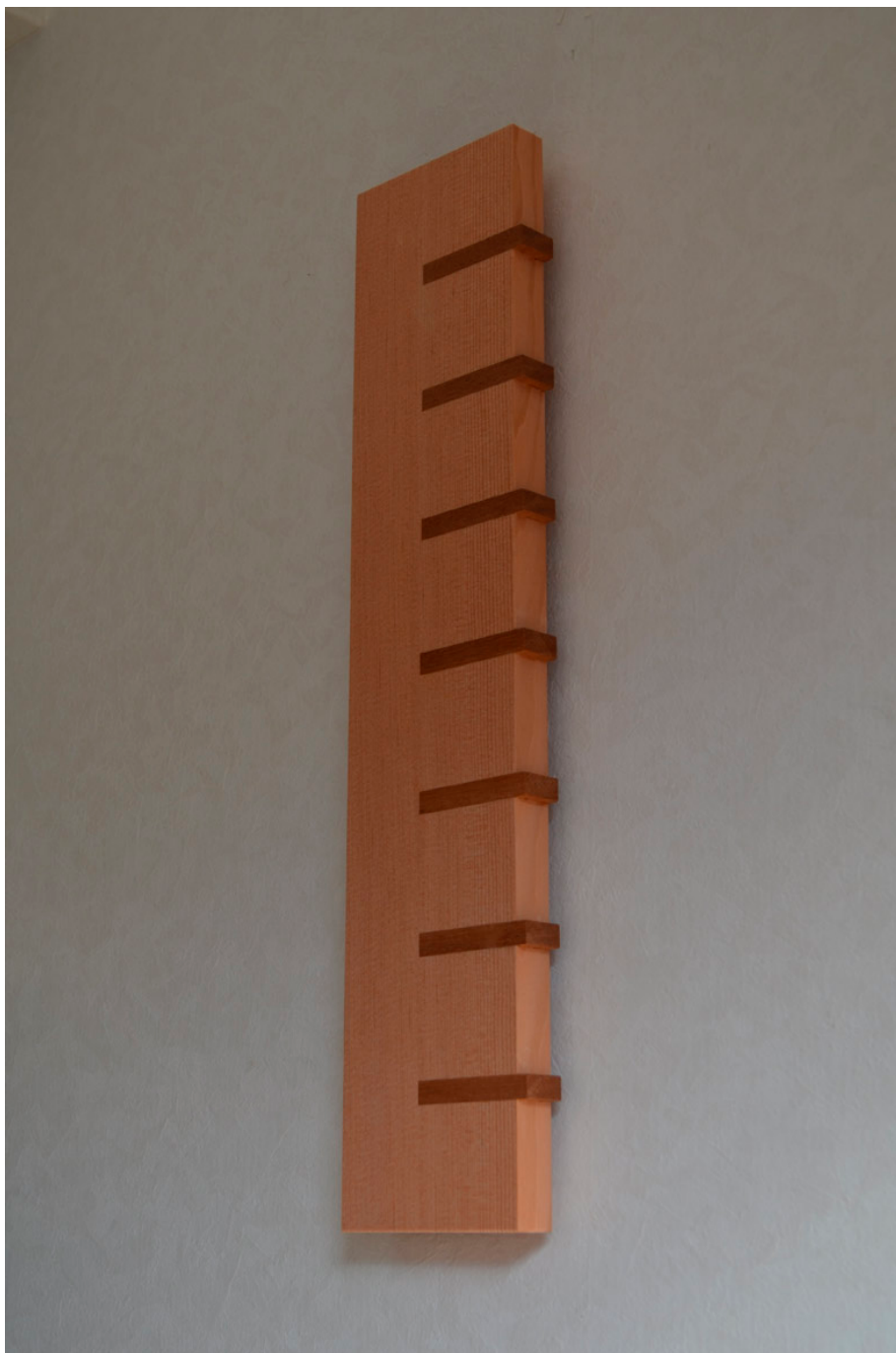
服部さんのペースはいつだってゆっくりと落ち着いて物事を進める人でした。だからというわけではないだろうけれど、作品の傾向も当時からあまり変わることなく、やはりこの写真にあるように寡黙な印象でした。派手に多くの色をちりばめ饒舌にしゃべり立てるようなことは作品上にも実生活上にも感じることはありません。

ここに展示された写真にしても、その殆どが赤と黒の2色です。

技法的には赤を先に塗り、その上から黒を重ねて、生乾きの時に堅くとがったもので、黒を削り取るスクラッチ的なものだと思っていたら、ひとつひとつの点を筆で絵の具を置いて描いているのだといえます。

これは集中力のいる作業です。その集中力をさらに凝縮して、赤と黒のグラデーションによって表面の色と形の位相を表しているのだと思います。

黒によって赤の存在が徐々に知らされ、赤が黒い世界を飲み込もうとしているのだろうか。あるいは、もののありさまというのが、比較の中であらわれ、ひとつのものだけで存在を表現できないということなんだろうか。絵画というのはやっぱり、象徴であり、比喩であったり暗喩だったり、何かしらの事柄



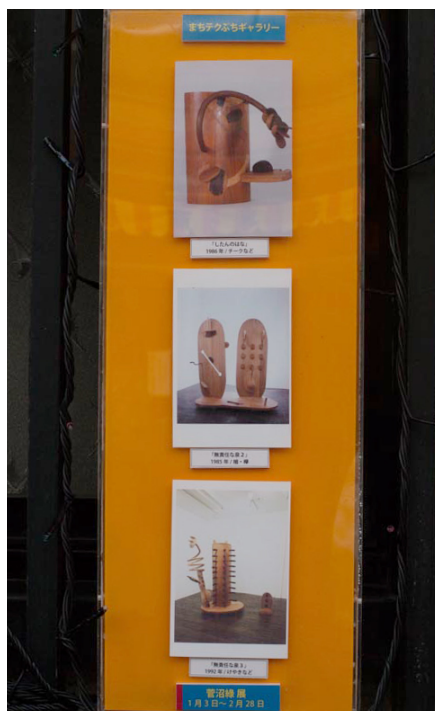
work 木 -2013poem 400x100x20cm 2013 年 木



⑫ 岡田新聞店 菅沼緑



⑭ 菅原電気 菅沼緑



⑮ 小田島宅 菅沼緑



⑰ 鈴木時計店 菅沼緑



work A (部分) 1979 年 油彩・キャンバス

